

# カルシユの足跡を追って

◇28◇

若松 秀俊

前回のようない見方もあったが、五期理乙の酒井勝郎はプラーゲの授業や小言の様子をリアルに描写している。松江高校の理科に入学すると毎週、一回一時間のドイツ語会話の授業があって、その先生がプラーゲだった。この先生は始業のベルが鳴ると、パッと教室へ飛び込んで来る。五分程度遅れて来る先生がほとんどなので、ベルの音を外で聞いて悠々と入っていくと、ニッとひと睨(にら)みして、闇魔帳に遅刻のマークをする。

さて授業だが、これがまた大変。ドイツ語に初

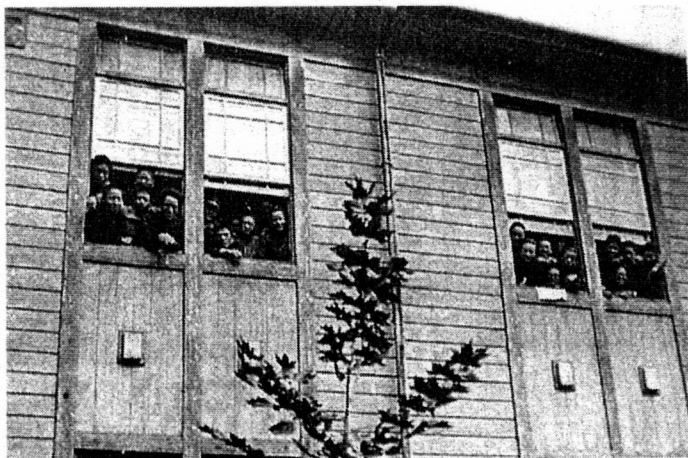
対面で、またアー・ペー外れることなく規則正しく当て、次第に後列に及ぶのである。だが新入生は誰も読めない。当てられて、口をもごもごし

とのないものだ。後で聞くと、ネヒストと云う。どうやら英語のネクストのことらしいので、一字ずつ指して読めと言った。席の者が眼を白黒させた。無理だ、読めるわけがない、と思っている暇もなく、どんどん全員に当てていく。

## 厳格で猛烈な会話訓練

### ドイツ語の授業

(中)



「ああ楽しい、我らともがら」松江高校校舎から

員に指名が三、四回に到達した始業四十分過ぎであった。最初はこれくらいで済んだのだが、次の授業からはもっと厳しい。一度教わったことを忘れて返事ができず、ヘドモドしている」と「ダメ、ダメ」というのはっきりとした日本語の叱声(しっせい)が飛んで来る。そして黒い表紙の闇魔帳に何やら記入するのだが、これが度重なるひとどい。

「お前のような者は、この学校へ入ってくる必要はない。家に帰って田舎で暮らしてなさい」といふ言葉を知らず、みんなに向けても「日本を馬鹿にしたのは、日本語で話している。ギリシャに誰かが教室で、突然大声を上げた。ドイツ語の字引を見て、大発見をしなかったのだ。あったら、ドイツ語にプラーゲという動詞がある。日本語では「苦しめる」とか「いじめる」という意味なんだ」とい

「どうなることか？」が一字ずつ読まれ、文章の草取りでも手伝った方があった。どいのは、(これは一脚の机である)「なーんだー」と思う。アイン ティッシュインのだ」といふようなあざむきであった。

「なーんだー」と思う。アイン ティッシュインのだ」といふようなあざむきであった。プラーゲの言葉は日本人の自尊心を逆なでするものだったが、もともと彼らはヨーロッパの学問

題の文のアルファベットになったのは、三十人の全

(東京医科大学大学院教授) 学院教授

文中敬称略